

## 島村一平著

『増殖するシャーマン——モンゴル・

ブリヤートのシャーマニズムとエスニシティ』

(春風社、二〇一二年)

山田孝子(京都大学名誉教授)

社会主義体制崩壊後のシベリアをはじめとし、中央アジア、ヨーロッパロシアなど、旧ソビエト連邦の各地における社会・文化動態は人文学・社会科学の関心を集めてきたところである。なかでも、長年の社会主義体制下での反宗教政策にもかかわらず、怒濤のごとくロシア正教、イスラーム、仏教、シャーマニズム＊などの宗教復興が起きたことは、改めて宗教の意味を考えさせる契機となっている。ポスト社会主義時代のシベリア、中央アジアにおける宗教復興の実態は多様な様相を示し、それぞれの地域、民族の歴史的・文化的背景と深く関わるものが明らかにされてきた。社会主義体制崩壊後のモンゴル国においても、旧ソビエト連邦地域と同様に宗教復興が起きているが、本書は、モンゴル国で少数派として暮らすモンゴル・ブリヤート

人、とくにアガ・ブリヤートを事例に、彼らにおける宗教復興、シャーマニズムの復興を取り上げ、宗教復興のもつ新たな局面を見事に読み解いたものである。

本書は八章で構成される。序章では、ディアスポラとしての離散の歴史、複雑な帰属意識、モンゴル国における被差別性など、モンゴル・ブリヤート人の集団としての悲劇性、ポスト社会主義時代における仏教の復興とシャーマン急増の概観が述べられ、調査方法、本書の目的が提示される。第一章では、本書の理論的背景として、ポスト社会主義と宗教復興論、ディアスポラ・エスニシティ論、モンゴル・ブリヤート研究におけるエスニシティ論と、三つの観点が取り上げられ、批判的検討がなされる。その上で、調査対象となるアガ・ブリヤート人の《二重のエスニック・ディアスポラ》という特殊性が指摘され、彼らの暮らしと地域の現状が描かれる。

第二章から第六章が本論に相当する部分となる。まず、第二章では、シャーマン、シャーマニズムをめぐる議論が俯瞰され、従来のシャーマニズム研究にみる「脱魂型」、「憑依型」といった類型論からの理論的脱却という立場が提起される。シャーマン、シャーマニズムは、それぞれ「超自然的存在と直接交流する(とされる)人物」、「自然環境や生業、政治・社会的状況によって変化する『不可知の存在』と人間とのあいだにおける象徴的な交換体系」と定義され、ポ

スト社会主義期におけるモンゴル・ブリヤートのシャマニズム、シャマンのイニシエーション、彼らが関与する超自然的存在、モンゴル国における彼らの宗教実践の周縁化という点から、宗教活性化の諸相が描き出される。

第三章は本書の核心部分となる章であり、父系系譜が帰属意識の核となるアガ・ブリヤート社会ならではのシャマニズム活性化の詳細が明らかにされる。シャマンの誕生が特別な病いを契機とし、病者からシャマンへの道をたどることは一般的であるが、アガ・ブリヤートにおいても、「オグに迫られている」という災因論にもとづく特別な病いがシャマン誕生の契機となることが示される。病者は、系譜上の祖霊となる「オグ」の同定によって失われた系譜を取り戻し、シャマンへの転換を果たすとともに民族的帰属意識をも取り戻すこととなる。このように、アガ・ブリヤートにおいて、シャマニズムがルーツ探求運動と連関し、エスニシティ再構築の原動力となることが解き明かされる。

第四章では、ルーツ探求によって開示されるルーツとは何か、シャマンたちの実例をもとに考究される。シャマンとなるにいたった人々は父系系譜知識に瑕疵のあった「オグのない」人たち、つまり、ルーツの断絶した人々であったこと、しかも、彼らを取り戻すルーツは、異出自の先祖の霊的ルーツ化、霊的ルーツの創出、実在した人物の

霊的ルーツ化、新しい父系系譜の創出などと、再想像されるものであることが明らかにされる。

第五章では、アガ・ブリヤートにおいて再想像されるルーツ概念における女性性が着眼され、この女性性と本来の父系系譜がもつ男性性とのずれの意味が、「ホイモルの女房」をめぐる信仰を基軸に検証される。そこには、ロシア支配時代の植民地化、さらには社会主義時代の女性シャマンたちが被った粛正という悲劇の記憶が織り込まれること、そして、この信仰を基盤とする彼らのシャマニズムは、モンゴル国の多数派集団や、その他のブリヤート人集団とも異なる自己同定化をもたらしingことが明らかにされる。

第五章までの論証において、アガ・ブリヤート人におけるシャマニズムの活性化とシャマン増殖現象には、彼らのディアスポラ性が深く関与することが明らかにされてきたといえる。これをうけて第六章では、シャマンのディアスポラ性が着目され、「宗教」——本書ではシャマニズムということになるが——による国境線によって引き裂かれた人々の共同性回復の可能性について、ロシア、モンゴル双方に居住するブリヤートの国境を越えるシャマニズム活動を事例に論究される。シャマニズムをとおした国境を越える連携は、「他者化されたロマンティズム」や「失われた故郷の理想化」といった相互の他者化を生み出すことが

明らかにされ、歴史的に引き裂かれてきた人々の国境を越えた共同性再構築の底流には「ある種の異文化誤解」があることが示唆される。

終章は本書の結論として、ポスト社会主義という混乱期のアガ・ブリヤートにおけるシャマニズムの活性化からエスニシテイ再構築への展開がまとめられる。アガ・ブリヤート人においてシャマニズムは、「ルーツの病い」への対処の過程をとおして、ルーツ概念やかつての制度化された「民族」概念の読み換え、自己を犠牲にした女性のエスニックな象徴としての選択、二重のディアスポラの感性による「複数の故郷」の想像、さらには国家によらない「脱集団化（脱領土化）」したネットワーク的エスニシテイの想像を生み出し、彼らのエスニシテイ再構築の源泉となってきたと結論づけられる。

以上、内容を概観してきたが、本書は、ポスト社会主義時代における宗教動態に関する秀逸な民族誌ということができる。本書のコメントとして、シャマニズム研究、ポスト社会主義における宗教動態研究に照らし、この研究のことも意義を指摘しておきたい。

シャマニズム研究をみると、シャマニズムをエクスタシーの古代技術と位置づけ、シャマニズムに特徴的な要素を「魂の旅」によるエクスタシーとし、精霊による「憑依」は必ずしも厳密な意味でのシャマニズムに属するもの

ではないとしたエリアーデの理論 (Eliade 1972 [1951]: 49-50) は、その後の研究に大きな影響を与え、シャマニズム、シャマンの定義、とくにシャマンの定義を「魂、魂の旅」型、あるいは「憑霊」型を含めるのかという論争が展開されてきた歴史がある。しかし、シャマンの経験する意識の分離状態を「脱魂」あるいは「憑霊」に当てはめることは概念化と言語化の問題であるという指摘 (Jones 1976: 2)、シャマニズムを実践する四二文化のうち、一二事例では脱魂と憑霊がともに起きるという報告 (Peters and Price-Williams 1980: 418)、シャマンを「自由に意識の分離状態に近づくことができ、他の人々にはできないコミュニケーションの要求を満たし、聖と俗との仲介者となる者」とする定義 (Heinze 1989: 355) など、一九八〇年代末にはこの論争は一応の収束をみてきた。近年では、二〇一二年のアメリカ人類学協会第一一〇回年次大会において「境界を防御・架橋するシャマンのコミュニティ」という分科会が開かれたように (2012 Annual Meeting Program Committee 2012: 443)、シャマニズム研究は社会的問題へと関心の展開をみせている。この意味で、第二章で提示されたシャマン、シャマニズムの定義のもとに、シャマニズムとエスニシテイ、越境という点から論証を進めた本書は、現代化が進行した今日もなおシャマニズムが求められる地域社会の現状を見事に読み解いた、シャマニズム研究

の最前線にあるものといえる。

本書のもう一つの意義は宗教の再活性化が文化的、民族的独自性に強く依拠することを豊富で詳細な事例をもとに活写した点である。旧社会主義圏各地における宗教動態は一樣ではなく、たとえば、筆者が調査対象としたサハにおけるシャマニズムの復興とエスニシテイの再構築の実態（山田 一九九八・二〇〇七）は、サハ共和国の国家としての独立までをも目論んだサハの政治的背景と不可分であり、島村も六四頁で指摘しているようにアガ・ブリアートにおける実態とは異なる様相を示す。また、ポスト社会主義期のカザフをみても、彼らのイスラーム復興は、再活性化の核心がカザフ人特有の死者の霊魂の概念を基盤とする死者のためのクルアーン朗誦という死者儀礼にあるというように（藤本二〇一）、カザフ文化に特徴的な宗教性にある。本書が明らかにしたアガ・ブリアートの宗教再活性化にみる確固とした独自性、言い換えれば想像によるものであるにせよローカルな伝統のもつ重要性は、グローバルとローカルの問題の再考上、特筆すべき事例となるものである。

最後に、本書が優れた宗教民族誌として成功した背景の一つは、豊富な情報資料の収集にあるといえる。シャマンを対象とする調査においては、霊的な秘匿性ゆえに情報資料の収集が困難で、思うような情報を得られないことが

多々あるのが一般的である。社会主義時代以前のシャマンにとつての「オグ」は何であったのかなど、興味つきない。困難を伴う調査対象にもかかわらず、シャマンたちの信頼を勝ち得たフィールドワークにもとづく本書は、資料的価値という点からも高く評価でき、地域研究の範になるものである。

#### ●注

\*1 島村の用語表記法とは異なるが、これまでの著者の表記にあわせ、「シャマニズム」「シャマン」を用いる。

#### ●参考文献

藤本透子（二〇一）『よみがえる死者儀礼——現代カザフのイスラーム復興』風響社。

山田孝子（一九九八）「サハ・ヤクートにおけるシャマニズム復興と自然の意味」『エコソフィア』一号、一二九—一四七頁。

山田孝子（二〇〇七）「自然との共生——サハのエスニシテイとアイデンティティ再構築へのメッセージ」前本孝・山田孝子編『北の民の人類学——強国に生きる民族性と帰属性』京都大学学術出版会、六一—九四頁。

Eliade, Mircea (1972 [1951]) *Shamanism, Archaic Technique of Ecstasy*. Princeton: Princeton University Press.

Heinze, Ruth-Inge (1989) *Who are the Shamans of the Twentieth Century? Mihály Hoppál and Otto von Sadovszky*

(eds.), *Shamanism: Past and Present*, Part 2. Budapest: Ethnographic Institute, Hungarian Academy of Sciences, pp. 355-361.

Jones, Rex L. (1976) Spirit Possession and Society in Nepal. J. T. Hinchcock and Rex L. Jones (eds.), *Spirit Possession in the Nepal Himalayas*. Warminster: Aris & Phillips, pp. 1-11.

Peters, Larry G. and D. Price-Williams (1980) Towards an Experimental Analysis of Shamanism. *American Ethnologist* 7 (3): 397-418.

2012 Annual Meeting Program Committee (2012) *Borders and Crossings (111th AAA Annual Meeting San Francisco, CA, November 14-18, 2012): Programs*. Arlington: American Anthropological Association.

#### ●著者紹介●

- ① 氏名……山田孝子(やまだ・たかこ)。
- ② 所属・職名……京都大学・名誉教授。
- ③ 生年・出身地……一九四八年、愛知県。
- ④ 専門分野・地域……認識人類学・宗教学人類学、ラダック・チベット、サハ共和国、沖縄。
- ⑤ 学歴……京都大学大学院理学研究科、理学博士。
- ⑥ 職歴……北海道大学文学部非常勤講師、京都大学総合人間学部助教、同大学院人間・環境学研究所教授を経て、現在にいたる。
- ⑦ 現地滞在経験……八重山地方の調査(一ヶ月間)に始まり、東カロリン諸島(四ヶ月間)、東アフリカのニインドウ地方(七ヶ月間)、インドのラダック地方(一九ヶ月)、シベリアのサハ・ハンティ地方(四ヶ月間)、インド・欧米在住のチベット難民およびチベット調査(九ヶ月間)というように、各地で調査に従事。
- ⑧ 研究方法……現地における参与観察などのフィールド調査資料を基本とし、統計資料・文献資料を補助とする演繹のアプローチ。人間—自然関係を念頭に置いたミクロの視点からのフィールドワークの経験を重視する。
- ⑨ 所属学会……日本文化人類学会、日本人類学会、American Anthropological Association, International Society for Shamanistic Research
- ⑩ 研究上の画期……東カロリン諸島での伝統的慣習に則った「鳥入り」、現地語使用のなかで体験した言語と文化の問題、シャマンとの出会いなど。
- ⑪ 推薦図書……伊谷純一郎『トゥルカナの自然誌——呵責なき人びと』(雄山閣出版、一九八〇年)。